

安田美充央、ロンドン録音の合唱曲をリリース！

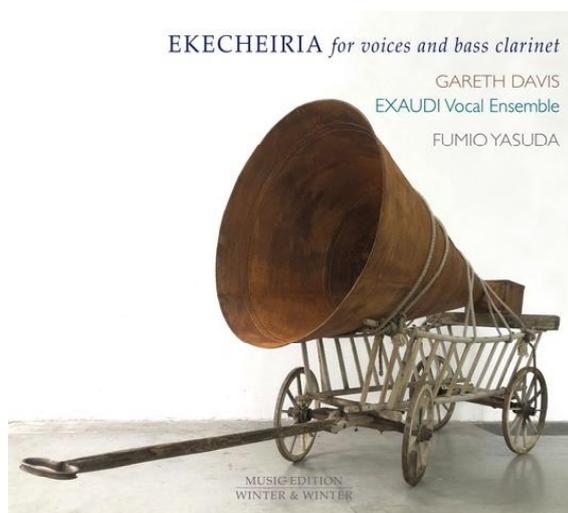
自身が主宰するブルクワレーベルでも積極的な活動を続けている安田美充央の、もうひとつのホームグラウンドであるドイツのWinter&Winterレーベルから、新譜が到着した。タイトルは、「『エケケイリア』合唱とバス・クラリネットのために」。

1972年、ミュンヘン夏季オリンピックで信じられない大惨事が起きた。パレスチナの過激派組織「黒い九月」によって選手村が襲われ、イスラエルの選手や大会関係者が犠牲になってしまったのだ。この事件はスティーブン・スピルバーグの映画『ミュンヘン』でも再現されているので、ご存知のかたも多いかもしれない。

その、50年後の2022年、このような惨事は二度とくり返すまいという決意表明と犠牲者を追悼するイベントがドイツでおこなわれ、安田美充央の作曲による六声の合唱とバスクラリネットの多重録音による組曲が初演された。それがこのアルバムの中心をなす、「ゲーム・マスト・ゴー・オン」である。

歌うのはエクサウディ・ヴォーカル・アンサンブル。現代音楽の超難曲も完璧に歌いこなす超絶技巧のヴォーカルグループと知られているが、このグループから六名選抜されている。指揮はジェームズ・ウィークス。さらにここにバスクラリネットの多重録音が重ねられている。

そして、この「ゲーム・マスト・ゴー・オン」の間に挿入されるのが、「エケケイリア」というタイトルがつけられたバスクラリネット奏者ギャレス・デイヴィスの即興演奏である。つまり、本作「『エケケイリア』合唱とバス・クラリネットのために」は安田美充央の「ゲーム・マスト・ゴー・オン」とギャレス・デイヴィスの「エケケイリア」によって構成されている。この構成を考案したのはプロデューサーであり、ウインター&ウインターの社長でもあるステファン・ウインターだ。



「ゲーム・マスト・ゴー・オン」と「エケケイリア」

しかしながら、本作の基本的な骨格をなしているのは、安田美充央が作曲した「ゲーム・マスト・ゴー・オン」である。そのことについて、二つのタイトルについて触れながら解説めいたことを述べてみたい。

「ゲーム・マスト・ゴー・オン」は、テロによって継続が危ぶまれたミュンヘンオリン

ピックにおいて当時IOCの会長だった、アベリー・ブランデーが大会の継続を告げるときに発した言葉でもある。また、「エケケイリア」は、「手をつなぐ」という意味を持っているが、端的に言えば「停戦」を意味するギリシア語だ。オリンピックは平和の祭典だとよく言われるが、停戦してオリンピックを競技を開いた古代ギリシアの慣習に由来している。そして、オリンピックと平和との関係を雄弁に語っているのが、古代ギリシア語で書かれた「エケケイリア」という宣言文なのだ。そして、安田の「ゲーム・マスト・ゴー・オン」には英訳された「エケケイリア」が歌詞として用いられている（さらには日本の声明からひびきの引用も）。つまり、「ゲーム・マスト・ゴー・オン」と「エケケイリア」を統合しているのは安田である。

「エケケイリア」のもうひとつの意味

さて、安田美充央がこの曲を書き、録音していた当時、新たな国際紛争が今度はロシアとウクライナで勃発し、そしていまも継続している。安田がこの戦争を意識しなかったわけではない。完成した曲「ゲーム・マスト・ゴー・オン」は、単なる追悼ではなく、我々が生きるいまこの世界に平和を実現しようとする意志の表れとして聴くことができるだろう。

なお、合唱曲の録音は2022年5月、ロンドンのセント・マイケル教会で行われ、ホールエコーの美しい録音に仕上がっている。それにしても、エクサウディ・ヴォーカル・アンサンブルの技術力はすさまじいものがあり、感嘆する。一方、スタジオで録音されたギャレス・デイヴィスの演奏は、ジャズを起源とするインプロビゼーションとはまったく違った、西洋クラシックとアバンギャルドの伝統に連なる技法と今を生きる現代音楽の野心的なテクスチャーとが合わさった演奏になっている。

そして、「ゲーム・マスト・ゴー・オン」と「エケケイリア」の二つのちがう音世界が拮抗し、掛け合わされ、全体として新しい世界を産みだしているのである。

ギャレス・デイヴィスと安田美充央

ギャレス・デイヴィスの詳しいプロフィールは別項を見ていただくとして、安田美充央との関係についてすこしだけ述べてみたい。ギャレス・デイヴィスは、多くの現代作曲家が彼のために曲を書きたいと申し出るほど、バスクラリネットにおいては突出した存在である。その理由を安田に尋ねると、「楽器の可能性をとことん追究し、新しい技法を貪欲に開拓する彼の姿勢が、現代作曲家を刺激するのでしょうか」とのことだった。実はそのギャレス・デイヴィスは安田とのコラボレーションを以前から切望しており、その念願が叶って本作の録音となったわけである。

安田美充央による解説

「ゲーム・マスト・ゴー・オン」は7曲から構成されています。編成は、エクサウディ・ヴォーカル・アンサンブル（6声）にギャレス・デイビスのバス・クラリネット（多重録音で2声～8声）を重ねました。ヴォーカルパートは、ソプラノ、ハイ・メゾ・ソプラノ、ロー・メゾ・ソプラノ、ハイ・テノール、ロー・テノール、バリトンの6声。歌詞として用いられているのは、古代ギリシャ語の「エケケイリア」を英訳したものです。さらに日本の古語訳、またそれをもとにするオノマトペも取り入れました。作曲家として、現状の世界の激変、またそれによって毀損される人間性の尊さを楽曲に投影したいと思ったのでした。

群を抜いたテクニックを有するエクサウディ・ヴォーカル・アンサンブルに歌えないメロディはなく、技巧的にはなんの制限なく作曲できたので、7曲それぞれに異なる大胆なアプローチを試みております。その中には日本の声明にインスパイアされたものもあり、中には通常の西洋音楽の唱法から逸脱するようなもの、日本の声明にインスパイアされたものなども含まれています。このこの上なく完璧な合唱の録音の上に、ギャレスには、クリックを使わず、曲によっては8声に及ぶ複雑極まりない多重録音を行っていただきました。

クレジット

エクサウディ・ヴォーカル・アンサンブル

指揮：ジェームズ・ウィークス

ギャレス・デイヴィス：バス・クラリネット（スタジオ録音）

録音エンジニア：デイヴ・ローウェル、ウィル・ブラウン、

マスタリング：エイドリアン・フォン・リプカ

プロデューサー：ステファン・ウィンター

CDタイトル

「エケケイリア 合唱とバス・クラリネットのために」

作曲：安田美充央 ザ・ゲームス・マスト・ゴー・オン, Part I~Part VII

即興演奏：ギャレス・デイヴィス エケケイリア I~VI

エクサウディ・ヴォーカル・アンサンブル

独 Winter and Winter(輸入盤910 288-2)

CDタイトル英語

„Ekecheiria for voices and bass clarinet“

Gareth Davis, Exaudi Vocal Ensemble

Fumio Yasuda

Winter & Winter CD N° 910 288-2

ギャレス・デイヴィス バスクラリネット

サルヴァトーレ・シャリーノ、ジョナサン・ハーヴェイ、ギャビン・ブライアーズ、ピーター・エトヴォス、など多くの作曲家がギャレス・デイヴィスのために曲を書いている。それほどに現代音楽におけるバスクラリネット奏者としては孤高の存在である。彼はヒリアード・アンサンブルのカウンターテナー、デヴィッド・ジェームス、ソプラノのサラ・レナード、ハーブシコードの巨匠ジェーン・チャップマン、ハインツ・ホリガー、シネ・ノミネ、ロセッティ・カルテットのクロイツァー・カルテット、クセナキス賞を受賞したコントラベーシストのコラード・カノニチらと幅広く仕事をしている。



©Neue Klangkunst

エクサウディ・ヴォーカル・アンサンブル

現代音楽では突出した存在となっているボーカルアンサンブルである。2002年にジェームズ・ウィークス（演出家）とジュリエット・フレイザー（ソプラノ）によってロンドンで結成された。Sciarrino、Rihm、Finnissy、Fox、Posadas、E.tv.s、Gervasoni、Skempton、Ayres、Pesson、Poppe、James Saunders など、国内および世界で初演をおこなっている。ただし、現代音楽一辺倒というわけではなく、新旧を組み合わせており、ルネッサンス期やバロックなどの楽曲でも活躍している。ロンドン・シンフォニエッタ、バーミンガム市交響楽団、アンサンブル・ランスタン・ドン、アンサンブル・モダン、アンサンブル・ムジークファブリック、アンサンブル・インターコンテンポランなど、多くの主要なソリストやアンサンブルと共演している。



©Neue Klangkunst

ジェームズ・ウィークス：指揮
クレシダ・シャープ：ソプラノ
ロッセ・ベッツ＝ディーン：メゾ・ソプラノ
ジェシカ・ギリングウォーター：メゾ・ソプラノ
デヴィッド・デ・ウィンター：テノール
ルアイリ・ボーエン：テノール
マイケル・ヒックマン：バリトン